

# 子どもたちのための医療福祉 — コミュニケーションへの希望を求めて —

## Health and Welfare for Children — From Standpoint of Retrieving Communication Mind —

佐々木 正 美\*<sup>1</sup>

Masami SASAKI

### 要 約

子どもたちのための医療福祉問題を、エリクソンのライフサイクル・モデルを中心に、子ども個人のQOLと同義的に捉えて考察した。現代人は健康な個人主義の域を逸脱し、不健康な利己主義に陥って、その結果多くが援助を渴望しながら生きている。

人間は他者との社会的関係を維持する機能を失えば、健全には生きていくことはできない。地域社会、学校(学級)、家庭等が多様な程度に次々に崩壊してきた。そのことは、人間関係の崩壊と同義である。人間が生きているということは、他者とのコミュニケーションを維持し続けることなしには不可能である。

大人たちの人間関係の崩壊の影響を、子どもたちは家庭、学校、地域社会等で直接受けて呻吟している。子どもたちのための医療福祉(QOL)の課題は、日本人のコミュニケーション機能の回復の上には解決も進展もない。

人間関係の問題は、生来コミュニケーション障害を特性の一部にもっている発達障害の子どもたちに、大きな被害を与えていることも考察し、問題解決への寄与が保健医療福祉系大学の使命あることにも言及した。

### 1. 緒言

日本人の平均寿命は世界最長に、他方合計特殊出生率は世界最少の部類に、それぞれ属することになった。世界で一番長生きをするわれわれは、子どもを生み育てる機能を、世界で最も失ってしまった。

そのことは、各地の保育園保育士、児童養護施設職員、学校教師、種々の団体の市民と、毎週のように30年以上も多様な勉強会を続けていると、歳月を追って鮮烈に実感される。

戦後の混乱を脱して、高度経済成長を達成し、自己実現という高邁な思想や命題を掲げて生きているうちに、われわれは健康な個人主義を大きく逸脱して、病的な利己主義や自己中心主義に陥っている。健康な人間関係を機能できなくなっているのである。

人間関係の喪失は、地域社会、家庭、学級等を次々と崩壊せてしまうことになった。考えてみれば、これらの機能は人間関係を基盤にして成立するものであるから、当然の帰結ではあった。

筆者は2006年の週刊医学誌で、「児童精神医学—臨床の最前線」という特集の編集を依頼され、児童期・青年期精神医学の「現在」に関する多様な問題を列挙して、わが国各地の研究や臨床の文字通り最前線で活躍する諸賢を推薦した<sup>1)</sup>。

児童期と青年期の総論をはじめ、各論として少年の非行、犯罪、パーソナリティ障害、摂食障害、注意欠陥多動性障害(ADHD)、特異な学習障害(LD)、虐待等の主題を用意した。

他方、現在は「発達障害の時代」ともいわれるほ

\*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科  
(連絡先) 佐々木正美 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

ど、子どもの養育、教育、福祉、医療等の領域で、発達障害が多様に困難な問題を噴出している。そのため当誌の編集では、発達障害に関する主題を別枠に選出して論述を求めた。

ところが寄せられた原稿を一覧して、認識を深く改めることになった。全ての分野や主題について論考された文章が、必ず発達障害について入念な論述をされていたのである。

即ち、今日わが国では、児童青年に関する全ての臨床最前線の主題について、発達障害の問題は回避できなくなっているのである。

近年、脳科学の先端を歩む研究者が示唆してくれる、前頭前野の機能の衰退に注目しなければならない。想像力、創造性、コミュニケーション、衝動の抑制等、高度に人間的な機能の中核として、人間にだけ特異的な発達が許されている前頭前野の機能が、発達や開発されにくくなったということが示唆されるようである。

われわれは子どもたちに、豊かな人間関係、即ち真のコミュニケーションを通じてしか育ててやれないその機能を、豊かに開花させてやれなくなったのであるのか。人間が人間的な資質や特性を失いつつあるような現状に、思わず慄然とするものを覚える。

他方、広汎性発達障害/自閉症、LD等、多様に見える発達障害の原因として、前頭前野の生来的な機能不全の関与も示唆されている<sup>2,3)</sup>。

さらに近年、虐待による第4の発達障害という障害分類の提唱もあり<sup>4)</sup>、アスペルガー症候群等高機能広汎性発達障害/高機能自閉症のように生来的な機能不全のある子どもと、健全な状態で生まれてきた子どもが、まるで相互に収斂し合うような類似性を示しはじめている現状も考察されなければならない。

本来医療福祉学とは、「いかに生きるべきか」「いかに死すべきか」という人生の大命題を科学的に、芸術的に、また、人への祈りを込めて、真剣に考えるものであり、医療と福祉の共通点、共有点をより鮮明にし、相互にそれぞれのもつ独自性を認めあうことによって、新たな実践科学とし体系化されるという江草の美しい基本定義がある<sup>5)</sup>。

本稿は、わが国の現実に生きる子どもたちに、どのような生きかた/人生を与えることが、われわれ医療福祉学の領域で働くものにとっての使命であるかを考察するものである。

## 2. ライフサイクルと子どもの発達

エリクソン、E. H. のライフサイクル発達論には、研究や臨床ばかりでなく、自分や家族の生きかたのためにも多くのことを学んできた。

発達 (development) を学力等の進歩 (progress) とは明確に区別して、人間性の本質を示されてきた。高学歴・高成績者の社会不適応が続出するわが国の実情の意味を明快に解いてくれる。

人間は集団欲を本能とし、社会的存在であることを運命づけられている。そして彼が説くように「すべての社会は子どもから親へと発達していく過程にある人間で成り立って」おり、社会の問題を論ずるときに、子どもの視点を見落としてしまえば、本質や問題の解決を見失うことになる。一人の人間の発達は、前の世代によって育てられ、次の世代を育てていくという、「世代連鎖」「歴史」「倫理」のつながりの中にある。

だから世代間断絶の大きい社会ほど、倫理の創造や継承を失うことになる。なぜなら、倫理は世代間伝達の中で、新たに時代に合わせて創造的に生みなおされながら、継承されていくのだから<sup>6,7)</sup>。

近年われわれの社会は、世代間の断絶が大きく、倫理の崩壊や消失も大きい。

### 2.1. 乳児期/「基本的信頼」対「不信」

エリクソンが説く乳児期の発達上の主題は基本的信頼 (basic trust) である。本来は発達上解決していくべき危機的な主題 (crisis) という意味であり、わが国では発達課題と称されることがあるが、永続的な社会的性格 (人格) 特性である。

その本質的な意味は、人を信じることであり、自分を信じることである。人間の発達に関して、他者と自分を信じることの本質は同質である。即ち他者を信じることによって、自己を信じるのであり、人間的な発達の基盤となる。

従って人間 (子ども) にとっての最初 (乳児期) の危機的な発達主題は、信じている他者 (母親ないし母親的な人) に会うことである。

カメラは自分以外の対象しか撮影できず、究極的な意味でも、鏡に写る自己機材を撮影する以外に自己確認の術がないように、人間も自分を投影する対象を通してしか、自己存在の意味を確認することはできない。母親ないし母親的な存在は、カメラ自身にとっての鏡の役割を果たす。

近年 MRI 等の検査機器の発展に後押しされて、急速に解明されようとしている、新生児や乳幼児の他者関係による脳機能の発達研究は見逃せない<sup>8)</sup>。

出生直後の新生児ですら、既に母親が話しかける母国語にのみ、見事な反応を MRI 画面上に見せる。父親や看護師らの語りかけには、見事なほど反応を返さない。

また東欧では古くから、妊娠中に母親が口ずさんでいた歌が、生後の子守歌として、幼い子どもの心

を特別になごませることが指摘されてきた<sup>9)</sup>。

昨年NHK教育テレビも熱心に放映したが、例えば3歳児が目の前にいる母親と日常的な会話をしている時には、前頭前野の機能が見事に活性化するのに、等距離の他者との対話になると、母親に寄り添われていても、脳の同部位はほとんど機能しなくなる。

その相違は成人が親しい友人と直接会話をしているのと、携帯電話で通話をしている時の差に匹敵している。また棋士が直接相手と対局しているのと、コンピューター画面の相手と対局している場合の差として、MRI画面には表示されるものに酷似している。

乳児期ないし早期幼児期の子どもにとって、その頃出会う「母なる他者」は成長後に感じる一般的な他者ではない。成長後に感じる母親というのではなく、自分が存在するために他にかけがえのない対象(人間)という実感であり認識である。未分化なまま存在する自分以外の、すべての人間や世界(やがて社会)の代表者である。だから、それを信じることは、自分自身ばかりか、やがてすべての人間を基本的に信じていけるようになる。

それだからこそ前頭前野の、いわば「中枢神経系の中枢」としての機能を賦活し発達させる意味をもつ。子どもを「人間」として育てるための、不可欠ともいえるほどの基盤的な意味をもつ。

エリクソン研究の一人者西平は、「他者を知覚する主体と、知覚される客体とのこの最初の出会い(つまり主体を<認知する>こと)が、あらゆるアイデンティティ感覚の始まりとなる」と解説し、「この出会いは、最終的には、青年期の終わりにおける社会心理的アイデンティティの確立のうちで最高潮に達する、発達の原点となる」というエリクソンの研究成果を紹介しているが、同感である<sup>7)</sup>。

さらに彼は補足して、「他者を見ている主観」と「自分自身を見ている主観」が同じであるという実感こそが、アイデンティティの基盤であり、その実感こそが、他者が見ている自己像と自分が見ている自己像とを統合する時の「根っこ」であるという。

この自他からの自己の統合がアイデンティティそのものであり、社会的存在の実感や実態になるのであるから、近年わが国に百万人の単位で存在する、ひきこもりやニート等の若者を考える時、子どもに基本的信頼の発達主題を解決するための役割を演じる「母なる人」の存在の意義は、再考を迫られている。

即ち子どもから見て、どれだけ信じるができる存在になり得るかということであるが、当然のこととしてそれは、母親一人が孤立や独立して担えるものではないし、担うべきものでもない。

本論の主題からして、わが国は現在、この母子関係の質の問題への対応は極めて重要なものである。エリクソンが基本的信頼の社会的存在の質として「希望」を規定し、その対概念としての不信(mistrust)には単純な反対概念の絶望ではなく、withdrawal(社会的ひきこもり)という病理を見てとった炯眼には、敬服せざるを得ない。

## 2.2. 幼児期/「自律性」対「恥と疑惑」

子どもの発達は手順を追って進行する。だから飛び級的なことはない。運動発達も同様で、乳児は首が据わる以前に寝返りを打つことはない。這行や座位、つかまり立ち、伝い歩き、独立歩行等はさらにその後、順序どおりにやってくる。

早期幼児期の発達主題の自律性(autonomy)は、基本的信頼の社会的発達の達成後に、その達成の度合いに応じて準備され獲得されてくる。

首が据わることは、寝返りの獲得や発達の準備ということでもある。

自律性とは、自分の意思による選択で、多様に両面価値のある機能や活動を統合していくことができる人格や性格の特性を意味する。基本的信頼と同様に永続性をもつ。

自律性の発達は、この時期の実生活の発達課題であるトイレット・トレーニングを例示して語られることが多いし、理解しやすい。

この時期の子どもは、排泄に関して「排出」か「貯留」かを自己決定したいという欲求をもつが、周囲の養育者の見解や意思と衝突もする。養育者から見れば失敗も多い。

だから、自由意思での選択や決定、さらに衝動の自制や抑制といった「自律性」の獲得には、その前提として養育者(他者)と自分に対する基本的な信頼がなくてはならない。

失敗と成功、叱責と称賛、衝突と合意等が繰り返されるこの時期の養育は、子どもの性格や永続性のある人格に自律性を与えるか、恥(shame)と疑惑(doubt)の感情を大きくしてしまうか、重要な岐路にある。

しつけという文化の伝達が始まるこの時期の子どもへの対応に対して、エリクソンは「穏やかに繰り返し教えて、成果はいつまでも待っていてやる」という表現をしたという<sup>10)</sup>。

周囲の期待に応えて、いつからそのことを実行するかは、本人に決めさせてやるのが大切である。その時期も含めて、子ども自身が決断と実行することを決めるのを待っていてやる。自律性とは、本質的には、そういう養育環境の中で育つ。

しつけと称して子どもを虐待してしまう親の行為

は、自律性を育てるものとは正反対の行為で、親自身の自律性課題が未解決のままであることを意味している。

少子化と子育て支援に象徴される現代のわが国の育児事情を考える時、この世代間を越えて未解決な自律性の問題が見えてくる。

そのことは同時に、基本的信頼の課題解決に起源をもつもので、「子どもたちの医療福祉」問題に限らず現代人の精神心理問題に起因する多くの社会問題の基底的因子になっている。

さらにこの二つの基本的な人間特性の基本様態の解決や発達には、自己と他者をつなぎ合わせる際の、即ちコミュニケーションのための基底要素であることを考えると、現代の日本人が子どもから大人まで、コミュニケーション機能の障害や喪失に苦悩していることの意味が、その根底から見えてくる。

緘黙、退行、不登校、いじめ、暴走、拒食や過食（摂食障害）、リストカット、ひきこもり、非行（犯罪）、売春、無気力、自殺、児童虐待、高齢者虐待、家庭内暴力、家庭内殺人等、コミュニケーションの不全や障害の多様な表現である。

## 2.2.1. コミュニケーション / ワロン

人間が出生から成長や発達の過程で、どのように「自己」を確立していくのか、ひきこもりやニートに代表される「自分探し」に苦悩する若者を見る時、ワロン、H.の研究には多くの示唆を得る<sup>11)</sup>。

乳児は生後1-2ヵ月で既に、母親の微笑みに対して笑顔を返してくる「微笑の交換」が始まる。2-3ヵ月になると、母親にできるだけ自分の傍にいたいことを要求する。立ち去ると泣いたり怒ったりして不機嫌になるが、戻ってきてやれば機嫌をなおす。

それが3-4ヵ月になると、母親に傍にいたいだけでなく、あれこれ自分が喜ぶことをして欲しいとせがみ始める。最も多く見受けられるのは、「抱っこ」であろう。

そして4-5ヵ月頃から半年を迎える頃には、子どもの感情発達はめざましく分化してくる。その本質は、自分が喜ぶことをしてくれればよいというものから、養育者も喜びを感じながら自分に喜びを与えて欲しいというものに劇的な変化をする。即ち喜びを分かち合いたいという感情の発達である。

この喜びを共有し合うことを求める感情の中に、人間のコミュニケーションの基盤があることを、ワロンは鋭く感じ取ったのである。さらに彼は、人間は他者と喜びを分かち合うことに喜びを見いだせなかったら、他者と悲しみを分かち合う感情は決して発達してこないことも、観察して確認しているのである。

相手の悲しみ、苦しみ、痛みを感受する感情は、他者と喜び合う経験の上にはしか発達してくるものではないという、長い歳月をかけたワロンの観察研究は、今日わが国の「子どもたちの医療福祉」を考える時、示唆されるものは大きい。

クラスメイトをいじめる生徒には、相手の悲しや苦しみを感受する感性が種々の程度に欠落している。そういう生徒が多いことと学級崩壊の問題が連動していることは自明である。

解決の糸口は、だれがどのようにして、子どもに喜びを与えることを喜びにするような育児や教育をするかということ以外に方策はない。

本来幼い子どもは存在するだけで、周囲の大人たちを幸福にしたのであり、それだからこそ子どもは三歳までに一生分の親孝行を済ませてしまうような存在でもあるといわれてきた。わが国の現代人がそのような文化や感情を失って久しいし、現在その結果に苦しんでいる。

## 2.2.2. 人間関係 / サリバンからエリクソンへ

優れた臨床者や人間研究者の人間観察力は鋭く深い。人間が人間を観察する場合、観察する自己の立脚点への考察も深い。本論の趣旨ではないので、深くは触れないが、主観の入らない人間観察や臨床科学というものはない。だから彼らが示す主観の意味の検討や考察は入念である<sup>12)</sup>。

結局、子どもの観察という場合、それは子どもと観察者との関係の観察になる。ソルボン又大学で児童心理学を講じたメルロ＝ポンティも言ったというが、子どもの本性というものではなく、あるのは大人に対する子どもの反応や関係である<sup>13)</sup>。

そのことは当然、大人と大人の関係でも同じである。エリクソンも指摘したように、臨床者は患者を見るのではなく、患者と自分との関係を見るのであるし、どんな事実も事実にも到達する過程での観察者のものの見方に依存している。

いずれにしても、優れた臨床者や臨床科学者は人間関係の意味を多様に重視している。

人道的な精神医療に生涯を捧げたとされる、アメリカの精神科医師サリバン、H.S.は、人間は自らの存在の意味や生きる価値を人間関係の中に見だし、人間関係を通してしか実感することができることを指摘している。

だから精神障害の人は人間関係に障害をもち、あるいは人間関係を喪失してしまっていることを重視して、その治療の最終目的を個人の間人間関係の回復ないし修復することに求めてきた<sup>12)</sup>。

その人間関係についてエリクソンは、質の高い

( high quality ) 関係とは、相互に与え合っているものに、双方が等しい価値 ( same value ) を認識し合っていることであると説いた。

そして比喩的な例として、母親が幼子と一緒にいることを幸福に感じる事ができれば、幼子も母親と一緒にいることが幸福であると説明した。同様に、生徒から学ぶことができる教師だけが、本当に生徒に教えることができるものであり、患者から与えられるものの恩恵に感謝のできる医者だけが、患者から感謝されるような治療が可能なのだとも説いている<sup>10)</sup>。

わが国の児童養護施設の職員との交わりを30年以上継続してきて、教えられていることがある。それは親から虐待を受けて施設生活を余儀なくされている子どもたちが、増加の一途をたどる現状の中で、子どもたちに観察される感情特性は、「ありがとう」と「ごめんなさい」の表現を口にすることができないということである。

どちらの言葉も、結局は相手の「どういたしまして」「いいですよ」「お互いさまでしょう」とう感情や表現を期待することで、自分の中にも発達してくる感情や表現である。そういう感情のある人間を育ててやるのが困難になりつつあるわが国の現状を、養護施設の子どもたちが代弁している。

### 2.3. 学童期 / 自主性

心から「ありがとう」と感謝のできる状況におかれることは幸せである。「ごめんなさい」と、他者に安心して言えることも、幸福なことに違いない。

学童期 ( 幼児期後半 ) の発達課題を、エリクソンは自主性、主体性、積極性という概念で説明した。

基本的信頼から自律性を経て、この時期までの発達を順調に経過してくると、子どもは疲れを知らないように、休息が不必要に見えるくらいに、よく動く。

次から次へ、あたかも感覚的に活動することが、この時期の子どもの思考そのものようである。

子どもたちは、絵本のなかの電車、消防自動車、象、ライオンを見ることにも感動や想像力をはたらかせるが、それ以上に本物の消防自動車に手を触れることや、実物の電車に乗ったり、動物園の動物を実際に見ることに喜び興奮を感じる。

物や木によじ登り、飛び降りたりして、高さを実感する。川縁の土手の斜面を、何度もよじ登り、時には滑り落ちたりもしながら、傾斜の性質を知る。

この時期の子どものこのような行動様態について、ピアジェ、J. は見事な比喩で説明したという。

曰く、「未知の分野を開拓しようとする第一線の科学者の営みである。彼らは同じ条件下で、同じ実

験を何度も繰返し、同じ結果を得たときに、ようやくそれが事実 ( 真理 ) であると納得する」<sup>14)</sup>。

エリクソンは、自発性や積極性のなかに含まれる創造性は、この時期の子どもが好む荒唐無稽の行動を通して育つことを指摘している。

現在わが国に多い若者のニート現象等で象徴される、自分探しの行動の背景を考える時、この時期の子どもの「遊び」は改めて再考されなければならない。

幼児期後半の幼稚園や保育園時代の子どもにとって、休息のない「いたずら遊び」の意味を、養育者や教育者は十分に認識や自覚していなければならない。

### 2.4. 学童期 / 勤勉性

人間が社会的に勤勉に生きてくための人格の基盤が、学童期に感受性が豊かに発達することであるというエリクソンの指摘は意味深い。

社会的勤勉性とは、個人が所属する文化の中で、社会的に期待される活動を、自発的・習慣的に実行することであると定義される。

そのために必要不可欠なことは、仲間と道具・知識・体験を共有し合うことである。言い換えると、社会的文化を共有し合う体験である。それはまた、友だちからものを学び、友だちにものを教える体験のなかで可能になる性質のものである。

近年のわが国の子どもたちは、親や教師等大人から学ぶことばかりを重視し強調し過ぎてきたのではないか。

勿論過去の子どもが、仲間同士で交換し合うことの意義や重要性を、それぞれの時代の大人から指導されてきたわけではない。子どもたちが自然にそのような営みをしていたのを、大人たちから妨害されなかっただけのことである。

子ども ( 人間 ) が成人した後、社会的に勤勉に生きていくための重要な人格基盤は、大人が直接育てるといよりも、子ども同士で育て合い、育ち合う要素が大きいことを、再認識したい。この時期の子どもには、広く多様な友だちとの日常的な交流が不可欠なのである。

学童期 ( 小学生時代 ) の子どもにとって、授業中ばかりではなく、放課後の学校や地域社会での子ども同士の活動 ( 遊び ) は、十分に保障されなければならないのである。

#### 2.4.1. 再び、遊びの意味

遊びに関して筆者は、ヴィゴツキイ、L. S. の研究に注目せざるを得ない<sup>15)</sup>。

子どもは友だちと遊ぶ時、必ず規則をつくる。仮に暗黙の了解のようなものであっても必ずルールをつくる。

遊びに参加するということは、そのルールを守り合うことを前提とする。そして役割を分担し合う。

役割は仲間の承認を得てそれぞれが分担し合う。

役割には責任が伴う。それを首尾よく実行できれば、仲間と喜びや感動を分かち合える。うまくいなくても、親しい遊び仲間は許容してくれることが多いだろう。

電車ごっこ、鬼ごっこ、スポーツ等を考えてみれば理解は容易である。遊びにはルールや役割があり、仲間と相互の信頼や承認があり、感動、共感、慰めがある。

幼い子どもの遊びから、少年や青年のスポーツまで、多様な遊びの場を綿密に観察した結果、ヴィゴツキが導き出した結論は、倫理観や道徳性に裏打ちされた社会的な人間性を導き育てる方策を、他に考え得ることはできないというものであった。

子どもたちは遊びの中にこそ、自主的・積極的な参加の上で、ルール、役割、責任というものに仲間と感動を共有し合いながら自らを同化するという、勤勉な社会参加をするために不可欠な課題を消化し解決していくのである。

一方で子どもにとっての遊びは、子ども時代のQOLやウェルビーイング（医療福祉）のみではなく、将来の社会的勤勉性につながる資質を育むもので、ライフサイクルの健康や幸福に深く関連する営みでもある。

改めて子どもの遊びの意義や重要性を再考せざるを得ない。

### 2.5. 思春期・青年期/アイデンティティ

エリクソンのライフサイクル・モデル研究に関して、学会や社会的な喚起を呼び起こしたものは、思春期・青年期の危機的課題のアイデンティティである。概念も用語もエリクソン自身による<sup>16-18)</sup>。

この時期のアイデンティティの確立は、自己の確立で自己同一性の確認である。Identity の概念は、identify の用語から導き出されたものだが、identification card が身分証明証を意味するように、アイデンティティは自分という固有の人間や人格の確認である。

未来に向けて時間的展望の中で、自分が担うべき社会的役割や責任を実感するための基盤である。

発達とは時間的経過の中で、必ず順序性をもって連続的になされる。この発達の前段階で、子どもは多様な仲間と遊びの活動を通して、役割や責任の感覚を習得しなければならなかったことの意味が理解される。

人間は自分になる過程を他者との関係を通して歩む。だからワロンが指摘したように、他者がなければ自己はない。

自己同一視は他者の目を通して自分を見ること

(自己洞察)によって可能になるところが大きい。思春期の若者が鏡をよく見るようになるのは、他者の目に自分がどう見えているかということに、関心が大きくなるからである。

幼児期の主観的な自己感覚から、思春期に入ると客観的な自己概念を求める。他者の目が気になる。その他者は自己概念の担い手でもある。だから自分に肯定的な評価を与えてくれる他者が必要になる。

思春期の若者が、価値観を共有できる友人としか交流をしなくなるのは、そういう意味がある。思想、信条、主義、主張が合致する仲間を求め合うのには、そういう必然的な意味がある。

その直前までの子どもたちが、広く多様な遊び仲間を必要としたのとは、大きく異なる。この時期の青少年は、気の合う友人の目(評価)を通して、自己を感じ確認していくのである。

「類は友を呼ぶ」という特性が最も顕著になるのはこの時期からである。しかしそのことを可能にするためには、学童期を通して、多様な友だちとの共感的な交流に日常的に恵まれてこなければならない。発達には順序がある。

だから中学・高校時代の少年たちは、サークルやクラブ等の、仲間と興味や関心を共有できる活動に、純粋に熱中し没頭するのである。

### 3. 子どもたちのための医療福祉

子どもにかぎらず人間は、社会的存在であることを運命づけられている。その存在意味の本質は人間関係の質(一部は量)によって規定される。

その他者性や関係性の本質は、ライフサイクルにおけるコミュニケーションの質とも言い換えられる。筆者はそれを医療福祉の質とも考えている。

#### 3.1. 母性

母性と父性に関する議論は多様で、結論はない。それぞれの社会の歴史や文化によってもさまざまに修飾される。それらのうちに本能(的)なものを見いだすものや否定するものまで、意味や価値の論議は幅広い。

精神病理学(特に犯罪病理学)に造詣が深い福島は、母性性に一部学習によるものを認めながらも、本能は否定できないという<sup>19)</sup>。

そして育児におけるその精神心理的な機能を、子どもを許容、受容、承認するものだとする。子どもに安らぎ、寛ぎ、憩いの場を提供し、ありのままであることを可能にしてやる機能である。

母親(父親も)ならば、だれもが多様な程度にもち合わせている心情である。子どもが健全に育つための基盤である。

この機能が不足すれば、子どもはそれを他者に求める。保育園などでは、その事実が鮮烈に観察され、家庭に母性的機能が不足していれば、子どもはその程度に応じて、保育者にそれを個別的に求める。すなわち保育者を自分一人で独占しようとする。

その欲求にどう応じるか、近年の保育者を悩ます最大の問題であり、その役割の重要性は等閑に付すことができない。いわゆる子育て支援に係わる広範囲の人々（や施策）の、最重要課題である。

筆者が30年以上の長期にわたって継続している、各地の保育園関係者との勉強会で得た結果では、家庭における母性機能の不足は、子どもが長じてほぼ確実に、思春期早期から異性との性関係を求めることになる。母性的機能の代償的な補償である。熊本県内の慈恵病院の「赤ちゃんポスト」の設置の背景には、このような問題がある。母子ともどもに不幸なことであるが、次善の策である。

### 3.2. 父性

父性についても福島はその機能について、子どもや家族に対して、善悪の判断、欲望の制御、価値観、倫理観、困難の克服、裁き、叱責等のことを明示するものだという。

母性が本質的に子どもを「ありのまま」受容し、「包容」するものであるのに対して、父性は「それではいけない」「こうでなければいけない」というもので、必要に応じて「排除」するものである。

しかしこの父性性にみられる欲望の制御は、エリクソンによれば自律性である。自律性は母性性に負うところが大きい基本的信頼の後に発達してくる機能である。

すなわち父性原理は母性性が十分に機能した後に意味をもつものである。この事実は、保育園の子どもたちを観察すると、確実に確認される。

保育園で生活年齢に不相応なルール違反や攻撃性等を見せる子どもに、単純な叱責は通用しない。そういう子どもは、改めて保育者によって母性性が与えられた後でなければ、決して規則に従うような父性性を受け入れようとはしない。人間的な感情は、そのようにできているのである<sup>21)</sup>。

筆者は40年間の児童精神医学臨床の中で、子どもたちは母性性が十分に与えられた後でなければ、決して父性性を受容する機能をもち得ないことを確実に学んだ。異常に厳格な状況で教えこめば、一見子どもはその父性原理的なものに従うが、それはエリクソンも指摘するように、「見せかけの前進」に過ぎない。発達には順序性がある。

不登校の少年の臨床や教育に造詣の深い森下は、彼らの回復や社会への再出発が、必ず母親への信頼

の回復から始まり、父親へのそれは何年か遅れることを教えてくれる<sup>20)</sup>。

この問題について発達心理学の見地から乳幼児を見つめた野村は、興味深いことを指摘している。家庭の中から父親の存在感が失われると、本当に家庭の中から消え去るものは父なるものより母なるものであるという<sup>22)</sup>。

### 3.3. 育児不安の母親とその夫

筆者はかつて当時の厚生省からの委託研究で、母親の育児不安等に関する調査をしたことがある<sup>23)</sup>。

神奈川県内の各地保健所に、乳幼児健康診査に幼い子どもを連れて訪れる母親に、育児に関する感情をアンケート方式で尋ねた。結果は他にも紹介したが、多くの母親は育児に積極的な喜びや生きがいを感じている。

しかし一方で育児に不安がないと答えた母親は全体の3分の1(33.8%)、育児に具体的な悩みごとはないという母親は5分の1(21.4%)に過ぎなかった。母親は子どもの身体、言葉、生活習慣、性格、しつけ等多様な問題に悩みを抱えている。

さらに育児中に「いらだち」を自覚するという母親になると、「時々(70.4%)」というものを含めると80%にも達し、子どもは生まない方がよかったと思う母親は、「時々(25.1%)」を含めると全体の3分の1にもなる。

しかしまた重要なことは、育児に喜びや生きがい等肯定的感情を表現する母親の回答で注目すべきものは、夫との関係であった。

その第1は、夫(子どもの父親)が育児に直接協力的に参加している(82.5%)という場合であり、次いで父親は必ずしも育児そのものを直接手伝うような協力はしていなくても、妻である母親との日常的な対話やコミュニケーションに意欲的で、母親がそのことに「満足している(67.3%)」というものであった。

即ち母親が夫(父親)との日常生活のありかたに満足している場合、彼女たちは育児に関係する不安や疲労等を感じにくく、健康も良好と答えるほか、育児への喜びや生きがいなど肯定的感情を自覚していた。

出生とともに子どもと最も濃密な人間関係の営みを担う母親(母性)の機能が発揮されるために、父親(父性)の役割の意味は大きい<sup>24)</sup>。

### 3.4. 家庭内の人間関係

夫婦や家族の人間関係について、1970年代中頃アメリカ・テキサス州ダラスの精神医学研究財団が実施した、家族機能に関する調査研究の成果は、今日わが国でも示唆を得るものが多い。家族が子どもの

養育に成功するか、或いは子どもが成長する過程で社会適応に破綻を来すことになるかの指標を、变量的に捉えることに成功した研究である<sup>25)</sup>。

社会的適応性がよい健康な個人を育てるのに、この研究結果が最も重要視した指標は、「家族のパワー構造」と称された家族機能である。家族の中のだれが主導性（権力や権威性ではない）のあるパワーをもち、家族システムの中にある問題解決の優先順位決定に際して、より大きな役割（決定と責任）を担うかというものである。

健康な子どもを育てる家族は、メンバー間のパワー構造が明確で、システムがしっかりしている。即ち父親が最大の主導性をもっており、母親が二番目のパワーをもっている。そして両親はそのことに合意合っていて、協調関係がよく、両親と子どもたちとの世代間には趣味や価値観等で、明瞭な境界線がある。

子どもたちは家族問題の決定や解決にパワーは弱い、発言等は保障されており、防衛的になる必要はなく、家族の課題は協力して遂行されることを知っている。

この場合、父親は何でも一番知っているという雰囲気はないし、子ども中心の生活の姿勢もない。

他方、子どもが重い反社会的ないし非社会的状態に陥ってしまう「重度障害型家庭」では、父親が健康な主導性のあるパワーをもっていない。父親が受動的で主導性のある役割を果たせないでいる。そしてその分だけ、母親と子どもの結合が強くなっている。母親との結びつきでより重症の社会性適応障害に陥っているのは、何故か男児であるという。男児が母親の支配的關係の中に取り込まれると、より重症の情緒障害や精神障害の危険が大きいことを、この研究は明確に結論している。

最も好ましくない家庭では、主導性の弱い父親と強い母子結合が観察され、子どもは青年期に至っても、あたかもエディプスの愛着の成熟過程から脱しきれず、近親相姦的葛藤に苦しむような状態になっている。親が思春期・青年期の子どもの暴力的要求に屈したり振り回されたりするのも、こういう家族関係の結果であることが多いという。

また中等度障害型の家庭では、世代間の境界はあっても、子どもが思春期・青年期を迎える過程で、親子間でパワーの奪い合いになっている。

このような場合、父親はしばしば権威的・権力的な支配力をもとうとしており、健康な家族のように、家族が安心して迎えるような主導的役割を果たしていない。家庭の中の整理整頓や礼儀作法等は、一見秩序が厳格に保たれようとしているが、自発的な家族

間の団欒はない。子どもは父親に対して拒否的・逃避的で、母親も夫（父親）に対して同様の態度を示している。子どもたちは頻々と非行を繰り返すか、非社会的で自発性の乏しい神経状態に陥っているということ、この研究調査は報告している。

### 3.4.1. 少年非行・犯罪と父親・母親

平成9年から11年の3年間に起きた少年による殺人事件と傷害致死事件の中から、単独で殺人事件を起こした少年10人と、集団で事件を起こした10人（5事例の主犯格と従犯格各1人）について、少年たちの生い立ちや家庭環境問題が、実証的に調査研究された。研究に携わったのは家庭裁判所調査官、裁判官、学校教員、精神科医師、少年事件関係機関実務家、学識経験者等16人である<sup>27)</sup>。

いわゆる世の中を震撼させた事件であるが、重大事件のメカニズムの解明に取り組んだこの研究が、最も重要な結論として指摘したものの一つは、父親の「大人性の欠如」である。未熟さ、父性の乏しさ、権威を保とうとして威張る。そのくせ子どもと正面から向き合えない。少年院に面会に来て、自分が反省して見せることをしないで、子どもにばかり反省を求めて問い詰める等の行為が鋭く指摘されている。

両親とも子どもに過大な期待を抱き、子どもの弱さを認めない。そうしながら、実際には子どもとのコミュニケーションの欠如は決定的である。子どもは親の自己愛的な態度から逃れて、自室にこもりがちになり、両親は子どもの実態を知らない。親子の絆は見失われている。

事件を起こすまで、あるいは勉強やスポーツで挫折するまでの少年は、親の期待に応えようとして「よい子」である。

### 3.4.2. 回復のモデル

反社会的行動を起こした少年が、ほぼ共通して抱えている感情について、筆者は児童自立支援施設や少年院の知人から繰り返し聞かされた言葉がある。

その1つは母親に向かって発せられるもので、テレビニュースの取材記者緒方も書いているが、「お前は、いつも居て欲しいときに居ないじゃないか」という少年の叫び<sup>28)</sup>。もう1つは少年院を出所する時、もう2度と戻って来ないかどうかは、少年が親を許すことができているかどうかということ。

矯正教育に当たる専門家は少年の心を、ある意味では親を許すことができるように導くことができるかどうかということも問われているという。この場合の許す対象は、実際には周囲の人間すべてに向けられるものである。エリクソンの説いた基本的信頼とは、人間（人類）全体を対象にしたものである。



その入り口のところで母親（母性性）が果たすべき役割（意義）は、誇張され過ぎることはないが、筆者は次のような事例に直面したことがある。

1999年8月にテレビ朝日系列で放映された番組の制作に参加した。筆者らは栃木県の喜連川少年院にテレビカメラを持ち込んでの取材が許され、数人の少年から率直な話を聞くことができた。

直接取材は当時のニュースキャスター渡辺興二郎氏で、誘導的な質問を避けた丁寧な取材に、少年たちは誠実に答えてくれた。

しかし自然に思いを語る少年たちの話題は、ほぼすべてが家族、それも両親についての感想や意見であった。だれもが両親によってどれだけ苦しめられて来たかという事ばかりを語った。

その中で一人、少年院を出たら将来どんな人になりたいかと問われた少年が、即座に「少年院の先生になりたい」と答えた。アイデンティティのモデルとして同一視して、尊敬できる教官に出会えたのだと、制作中のスタッフは思った。思春期を迎えても、過去の生育歴の問題を清算して、見事に立ち直ろうとしているモデルとしての少年に出会えた思いであった。児童・青年に対する臨床や医療福祉の営みの、典型的なモデルである。

このような回復の過程を歩むということは、家族を含めた過去の「人間関係」を清算するほどの、新たな人間への出会いを必要とする。

### 3.5. 家庭外の人間関係

先の家族間の主導性を中心にしたパワー構造の意味を解き明かした研究が、さらに指摘していることは、家族にとっての家庭内人間関係と同様に、家庭外の人間関係の意義である。

子どもを育てることに成功している家族の共通事項には、地域社会や職場等家庭外の人間関係の意義が示されている。むしろ家庭内のみ人間関係で、家族間の人間関係が健全に機能し維持されるということはないと考えるべきである。

この研究が紹介している結論は、健康な家族のほぼすべてが、家族ぐるみともいふべき他者関係を、地域社会にもっているともいふものである。

現代のわが国が、各地で地域社会を失ったと表現されるが、それは人間関係を失ったことに他ならない。現代人の人間関係機能の喪失以外のものではない。コミュニケーション機能の喪失は人間性の喪失と同義である。地域社会（コミュニティ）の回復は、個人のコミュニケーション機能の回復以外に方策はない。

だから地域社会の崩壊と家族の崩壊は同義である。

### 3.6. コミュニケーションの回復を求めて

子どもの医療福祉は、子どもをとりまく人々のコ

ミュニケーションの機能を等閑に付したままでは成就しない。それは同時にあらゆる人間の医療福祉の問題でもある。

筆者は臨床者である。多くの同業者がそうであるように、高所大局的に物事を判断し処理する機能が乏しい。個人的（個別的）な向き合いの中で仕事をしてきた。子どもたちが日々を生活している場に出向くようにして機能してきた。保育園や学校には、迎えられもしながらよく出向いた。

特に保育園の保育者との勉強会の類は、30余年間ほぼ毎週絶やしたことがない。幼い子どもと家族にはよく出会い、子どもたちの成長や発達には継続的に触れてきた。

子どもにとっての両親や家族の意味は深遠過ぎて、説き明かせない。しかし子どもは両親や家族だけでは、健全な社会人に育てることはできない。家族以外の多くの他者が必要不可欠である。

しかし子どもたちは幼少期であればあるほど、その他者が自分の保護者と親しく信頼関係が豊かであってほしいと願っている。このことは、子どもを育てる養育者、保育者、教育者は熟知してほしい。

だから筆者は、保育園の保育者は保護者との親しみ（信頼関係）を、子どもたちに理解しやすく伝えてほしい。朝夕に子どもを受け渡す際、子どもたちの見ているところで、「ぼくの、わたしのお母さんやお父さんは、園の先生と仲良しなのだ」と子どもたちが感じ取れるような受け渡しをしてほしいと思う。

たったこれだけのことを努力するだけで、子どもたちの保育園での生活が、どれほど生き生きしたものになるか、実践している人々はよく承知している。

近年わが国では、子育て支援の声がかまびすしいが、多くの人が子どもを育てることに関与すればいいというものではない。子どもたちは、自分の両親や家族と親しい関係にある他者の手の中で育てられたいと願っている。そうでない他者の手を多く借りるような育児は、施設をたらい回しにされているに等しい。

そういう意味で、保護者会（PTA）と親密でない教師集団の学校教育は、真の人間教育をしていることにはならないと思う。人間は人間関係の中でこそ人間らしく生きることができるのである。

## 4. 結語

健康な個人主義を逸脱して、不健全な利己主義の傾向を深めている日本人は今、コミュニケーション機能不全の状態に陥りながら苦悩している。

過日、青年期精神医学に造詣が深い野田正彰氏が新聞紙上で、未来を生きる若者へのメッセージとして「生きるということは、コミュニケーションをし続けること」だと説いていた。同感である。

しかしコミュニケーション機能は、幼少期から家族や周囲の人と「喜びを分かち合う」ことから発達し始める高度に人間的な機能であることを、ワロンは古くから解明していた。

エリクソンはそれを、他者を信じて自分を信じる過程を抜きにしては得られない機能であることを教えてくれた。できれば人生の可及的早期に、信じることができるような人、言い換えれば自分に喜びを与えてくれることを喜びにしているような人(母親的な人)に出会えることが意味深い。

人間が非社会的・反社会的な行動に陥らずに、社会的存在として生きていくためには、自らのコミュニケーション機能に頼らざるを得ない。

現在百万人ともいわれるひきこもりの人たちや、65万人ともいわれるニートの若者たちに、コミュニケーション機能の発達を支援することは、わが国の医療福祉問題の最重要の主題である。

本論はそういう生き方に至る人間の過程を解説したものである。それは子どもに限らず人生(生命)の質(QOL/医療福祉)を意味する。

コミュニケーション障害の最も不幸な具体例は、現在わが国で増加の一途をたどり、多発し続ける親子間の虐待であり、家族間の暴力であり、学校における生徒間のいじめである。児童虐待は孤独や孤立から発生する。かつて児童虐待の歴史は、移民の間で明らかになったことを学んだ<sup>26)</sup>。

人間関係の不幸な面(コミュニケーション不全)は家庭内で顕在的になりやすい。日本人は今、家庭をもつことに躊躇する人が多くなった。2005年の国勢調査は、男性・女性とも未婚率(一度も結婚経験を持たない人の比率)の急上昇を教えてくれる。45-49歳の未婚率は男性で17.1%である。これは1960年1.4%、90年6.7%、2000年14.6%であった。女性も同様に、60年2.1%、90年4.6%、00年6.3%という経過である。

日本人のコミュニケーション不全は、家族を持つ

ことや子どもを育てることへの希望や喜びを見失いつつある<sup>30)</sup>。コミュニケーションに喜びを見いだす過程に、子どもの社会的人格の発達がある。

そして本稿では触れることができなかったが、発達障害の子どもや人々にとっては、この発達過程を充実して経過していくことがより困難なことは、容易に理解できる。コミュニケーションの質的相違を特性にもって生まれてきた人々である。(この問題については、稿を改める機会に恵まれることを願っている。)

だから現在のわが国では、長期間のひきこもりや強い攻撃行動に象徴されるような、非社会的・反社会的な不適応状態を主症状とするような、児童青年精神医学の広範な領域で、発達障害の子どもや青年が多様な困難を、時として典型的な形で抱えているということは、改めて理解し認識し合わなければならない。わが国の児童青年の精神保健や医療福祉に関する問題が、いわば凝集された形でここにある<sup>29)</sup>。

本学は保健医療福祉の総合大学として、この問題の解決に向けての研究や実践を志向している。1999年度から、学校教育者、福祉施設従事者、一般市民と協働して、定期的な学習会を実施し、2002年度からは「広汎性発達障害/自閉症特別夜夜講座」を開校してきた。

また2004年度には、自閉症の人や家族を支援するための総合的・包括的プログラム TEACCH(注)を開発して、世界的な普及に成功したノースカロライナ大学と姉妹大学の提携(Academic Partnership Agreement)を終えた。

そしてこの度2007年度からは大学院修士課程に TEACCH コースを新設し、さらに社会人にも門戸を開いて、発達障害の人々を支援するための教育や福祉関係当の専門家養成を目指している。保健医療福祉の専門大学としての使命である。

他者と共感し合って交流するという、人間のコミュニケーション機能の視点に立った医療福祉の問題の解決は、子どもや発達障害の人々に限らず、現代のわが国のすべての人々が、共通して深く求め合っている課題を多様に内包していることを再認識して稿をおく。

#### 注

TEACCHは Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped CHildrenの略で、Eric Schoplerらにより、アメリカ・スカロライナ大学で研究開発された、自閉症の人々に対する包括的プログラム。共生・協働をめざす優れた理念と、その実践のための卓越した方策等は、世界の関係者の共感を呼び、全米45州、全世界の45カ国以上で、多様な導入と普及がなされている。

## 文 献

- 1) 佐々木正美(企画): 児童精神医学, 臨床の最前線. 週刊医学のあゆみ, 21(10), 2006.
- 2) 熊谷高幸: 自閉症, 私とあなたが成り立つまで. ミネルヴァ書房, 2006.
- 3) 十一元三: 広汎性発達障害と前頭前野. 臨床精神医学, 32(3), 395-404, 2003.
- 4) 杉山登志郎: 子ども虐待という第四の発達障害. 学習研究社, 2007.
- 5) 江草安彦: 高齢化時代の医療福祉, しあわせな生活設計のために. 山陽新聞社, 1992.
- 6) Erikson EH: *Childhood and society*. W. W. Norton, 1950. (仁科弥生訳, 幼児期と社会. I, II, みすず書房, 1977, 1979.)
- 7) 西平直: エリクソンの人間学. 東京大学出版会, 1993.
- 8) 小泉英明, 牧敦, 山本由香里, 川口英夫: 脳と心を観る, 無侵襲高次脳機能イメージング. 電子情報通信学会誌, 87(3), 207-214, 2004.
- 9) 大島清: 胎児に音楽は聴こえるか, 生命誕生の科学と神秘. PHP 研究所, 1988.
- 10) Cline CL: 1970年筆者留学中のプリティッシュ・コロンビア大学教授. 私信による.
- 11) 浜田寿美男: ワロン / 身体・自我・社会. ミネルヴァ書房, 1983.
- 12) Sullivan HS: *The interpersonal theory of psychiatry*. W. W. Norton, 1953. (中井久夫他訳, 精神医学は対人関係論である. みすず書房, 1990)
- 13) メルロ=ポンティ, M. (竹内芳郎, 小木貞孝訳): 知覚の現象学 1. みすず書房, 1967.
- 14) Piaget J: *La naissance de l'intelligence chez l'enfant*. Neuchatel et Paris, Delachaux & Niestle, 1924. (谷村覚, 浜田寿美男訳, 知能の誕生, ミネルヴァ書房, 1978.)
- 15) ヴィゴツキー, レオンチェフ, エリコニン他. 神谷栄司訳: ごっこ遊びの世界, 虚構場面の創造と乳幼児の発達. 法政出版, 1989.
- 16) Erikson EH: *The problem of ego identity*. J Amer Psychoanalytic Ass, 4, 56-121, 1956. (小此木啓吾訳編, 自我同一性. 誠信書房, 1973.)
- 17) Erikson EH: *Identity and the life cycle*. International Universities Press, 1959. (小此木啓吾訳編, 自我同一性. 誠信書房, 1973.)
- 18) 小此木啓吾: モラトリアム人間の時代. 中央公論社, 1978.
- 19) 福島章: 青年期のカルテ, 受験世代の心理と病理. 新曜社, 1981.
- 20) 森下一: 不登校児が教えてくれたもの, 3000超の症例が発する日本の父母へのメッセージ. グラフ社, 2000.
- 21) 佐々木正美: 子どもの成長に飛び級はない. 学習研究社, 2006.
- 22) 野村庄吾: 乳幼児の世界, 心の発達. 岩波新書141, 岩波書店, 2001.
- 23) 佐々木正美: 子育て不安と子育てネットワーク形成に関する研究. 平成4・5年度厚生省科学研究報告書, 1993, 1994.
- 24) 佐々木正美: 母性・父性, 父性の現代的理解. 清水凡生編, 総合思春期学, 診断と治療社, 2001.
- 25) Lewis JM, Beavers WR, et al: *No single thread—psychological health in family system*. Brunner/Mazel, New York, 1976. (本多裕, 国谷誠朗他訳, 織りなす綾, 国際医書出版, 1979.)
- 26) 佐々木正美: 被虐待児症候群. 臨床精神医学, 8(8), 909-916, 1979.
- 27) 家庭裁判所調査官研修所監修: 重大少年事件の実証的研究. 司法協会, 2001.
- 28) 緒方喜子 / 中京テレビニュース取材班: ゆれる親子, 見失った絆を求めて. 丸善, 2002.
- 29) 熊上崇: 広汎性発達障害を持つ非行事例の特徴. 精神神経学雑誌, 108(4), 327-336, 2006.
- 30) 中島梓: コミュニケーション不全症候群. 筑摩書房, 1991.